

## 「一度アフリカの水を飲んだ者は再びアフリカに帰る」

どこかで耳にしたこのフレーズが何故か脳裏のどこかに留まっていた。そして、平成22年の夏、初めて経験したアフリカ。平成23年春、図らずも私はこのフレーズの実証者となっていた。

初めてのアフリカ（ケニア）の訪問。現地で目にしたり活動したりした体験は、今まで持ち合わせていた自分の概念を打ち破った。未開の地としてのイメージや一面的な情報・認識が、如何に浅はかで稚拙なものであったかを痛感した。偏見ともいいくべき自分の感覚に恥じ入るばかりか自責の念すら抱いた。現地の方との交流から自分が感じたことは、家族や仲間を思いやり、異国から来た見知らぬ自分たちにも精一杯のもてなしをしてくれるケニアの人々の温かい気遣いと優しさであった。貧困や苦しみから滲むすさんだ気配すらなく、日本人の忘れてしまったコミュニティの温かさに新鮮な感動を抱かせてくれた。

ホームステイ先で寝食を共にする生活は、決して豊かとは言えない自給自足の日常の繰り返しであった。しかし、ありままの日常をありのままに受け入れる自然体の穏やかさがそこにはあった。皆が助け合い、足りないものを補いながら生きていた。

今回の訪問であらためて確信したことがある。

それは、人々は生きている。楽しく、幸せな人生を送っているということ。

そして、今回の訪問ではっきりしたことがある。

それは、現地の人々を不幸にあえぎ苦しんでいると決めつけ、何も見ていない先進国の人々が誇り高く国際協力という名目で行っている活動は、現地の人にとっての利益に全くつながっていないということ。さらに、名目だけの施し（国際協力）がなくても、ケニアの人々は大きな思いやりの心と幸せに生きる桁外れの強さがあるということ。

今回の1か月半に及ぶアフリカ訪問。

「一度アフリカの水を飲んだ者は再びアフリカに帰ってくる」の実証者となった自分の胸に刻まれたこと。

それは、知らない土地に入ってプロジェクトを始め、受け入れられる難しさだった。アフリカ人はある意味したたかである。元気にあいさつを交わしながらも、この人は何のためにここにきたのか、自分たちに利益をもたらしてくれるのかどうかを分析している。日本の大学などまるで知らないケニアの村人たちにとって、自分たちの学歴などは少しも重要ではない。先進国の人間が途上国に行く際に、誇らしげに掲げていくものは、ここではまったく役に立たないことを知った。

アフリカの貧しい村人に最も欠如しているものは何か。それは「白い人々に尊敬される

ことだ」という喜田さんの言葉に衝撃を受けた。それこそが、突然来た異国の人アフリカの村で受け入れられるためには最も重要なことではないのか。どんな人にも敬意を持って、相手が感じ考えることを理解しようと努めること。当たり前のことだけど、これが国際協力をする上で忘れてはならない“根源”だと感じ取った。

自分が心からの敬意を持って相手に接すれば、相手も必ず敬意を持って応えてくれる。いつもケニアの人々と本心を分かちている喜田さんの携帯電話は、日本で起こった地震を心配するケニアの人たちからの電話が鳴り止まなかった。先進国として時代の先端を走り、豊かな経済と文化を享受していた日本。ともすれば仰ぎ見られる国として評価されていると自認すら抱いていた日本人。歴史的な災害に打ちのめされている日本の状況を察し、知人である喜田さんの携帯電話に寄せられるケニア人からの電話。この光景に遭遇した自分は言葉にならない大きな衝撃を受けた。大袈裟かもしれないが、地球に生きる人間としての在るべき姿がここに濃縮されているのではないだろうか。国境を越え、社会を超え、貧富の差を超え……。

人間としての在り方を見せつけられた思いであった。

そしてもう一つ。ホームステイ先の女性グラディスは、私が今まで出会った中でも1.2を争うほど精力的な女性だった。私たちがホームステイでお世話になったグループのリーダーを務めながら、2008年の暴動で多くの人が亡くなり、傷ついたコミュニティの復興を目指し、新しいサッカーチームを結成した。今ではそのサッカーチームも徐々に増え、周辺のコミュニティをも巻き込んで大きな組織となり、平和にも大きく貢献している。何事も信念を持って臨むこと。1人1人に大きな力は無いけれど、みんなが集まれば大きな力になる。そして、強い信念は多くの人を動かし得るのだということを、この1人の女性に教わった。

自分は前回のアフリカ体験訪問で既成概念を打ち破られるほどの多くの衝撃を受けた。今回、その多くの衝撃の余韻から、現実的な幾つかの新しい認識の形成が始まった感覚を抱いている。現時点でそれを以下に要約表記する。

人々が本当に必要としていることは何か。絶えず自問自答する過程を通し、肌で感じ、心で気づき、その本質を理解する。人間としての感性と理性を磨き、柔軟に対応できる素地（基盤）を築く。その背景には誰に対しても抱くべき真摯な敬意と心からの感謝の気持ち。これこそが、今、自分が基盤とすべき国際理解と国際貢献の概念規定である。

自分自身の深化を見定めるために、自分は「再びアフリカに水を飲みに帰ってくる」